



もっと
知りたい!

日本の国土とくらし

寒い土地の くらし

田部俊充 監修



1

1 寒い土地のくらし



寒いのはどんなところ？	4
日本海側に雪が多い理由	6

▶ 北海道を見てみよう

農業① 寒い土地での米づくり	8
農業② 冬はハウレンソウづくり	10
酪農 広い牧場で乳牛を育てる	12
製造業 良質の木材は家具にむく	14
特集 校庭でスキーの授業	16
住 家の中全体があたたかい	18
衣 身につけるもののくふう	20
道路① 安全な道路にするくふう	22
道路② たいへんな除雪と排雪	24

祭り 雪と氷があるから遊べる	26
動物 寒さに強い野生動物	28
植物 寒さにたえる樹木や草花	30
食 からだをあたためる料理	32
コラム アイヌの人たちの歴史とくらし	34

▶ 日本全国の寒い土地	35
三陸地方 海岸ぞいを走る列車	36
十日町市 住民が協力して冬をすごす	38
前橋市 からっ風で、たこあげ	40
白川郷 世界遺産の村の雪景色	42
鳥取砂丘 西南日本にも雪がふる	44

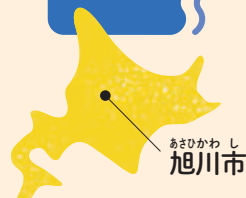


はじめに

小学生のころ、住んでいた千葉県から滋賀県の父のいなかに行ったことを、いまでも思い出す。日本で一番大きい琵琶湖に行って毎年泳いだこと、祖母が琵琶湖でとれたフナをごはんといっしょにつけこむフナずしをつくってくれたこと、新幹線の米原駅で北陸本線に乗りかえると最初は言葉が聞きとれなかったこと、正月は寒くて雪が深かったこと、食べる餅が丸かったこと。

いろいろな場所があって、そこにはいろいろな人が住んでいる。行ってみたい、もっと知りたいと思えるすてきな場所が、この日本のなかにはたくさんあるよ。『もっと知りたい！ 日本の国土とくらし』で、きみがそんな場所と出会えることを願っています。

特集



旭川市

校庭でスキーの授業

寒い地域では、体育の授業でスキーやスケートを習うところが多いよ。旭川市の朝日小学校は、校庭に雪山がつくってあるんだよ。



階段ですべらないように

自分専用のスキー板など荷物をいっぱいもって雪道を登校。

ましがえて、左右のくつを逆にはいてしまう子もいる。

スキーぐつをはくのってたいへん



準備体操

1時間めは1年生。校庭に集まったら、まずしっかり準備体操をする。雪山は校舎の2階ぐらいの高さがある。

すべる練習

先生の合図でひとりずつすべる。



すべれるようになったよ

道具を準備



足をハの字の形にしてすべるように習う。

3年生はこのあと体育。教室の前にスキー板が並んでいる。

クリークで水と遊ぶ



クリークは、一時使われなくなりました。しかし近年では、クリークでのイベントがもよおされるなど、再活用されはじめています。

舟遊び、川床などのイベント

クリークは利水・治水の役割のほか、船での移動など、むかしは交通手段でもありました。その後、道路が整備され、水道が普及すると、クリークはだんだん使われなくなっていきました。すると、清掃も不十分になり、人が近寄らない場所になっていきました。

そうした状況を改善するため、町の人たちが力を合わせ、クリークをきれいで楽しい場所として活用する取り組みが始まりました。カヤック体験などの舟遊びや、川床とよばれる場所をつかって、飲食店やマルシェ（野菜や食品の市場）などをもうけ、遊びや観光の場として、活用されています。

イベントの場に



大勢の人にマルシェにきてもらうよう、舟着き場もつくった。

地域の人たちが力を合わせて、イベントは成功！

清掃も積極的に

クリークをきれいに保つには清掃がたいせつですが、ふだん使わないところを掃除させられるのは、いやなものです。けれど、クリークを楽しもう、使おう、となると、清掃をする気がわいてきます。また、市民活動団体では、SDGsを学ぶ講座と作業を組み合わせ、清掃をイベントにするなど、多くの人が参加しやすいくふうをしています。



春と秋に、地域の人たちがクリークのいっせいで清掃をするので、町じゅうのクリークがきれいに保たれている。

カヤック体験



左右に水かきがついたパドル（かい）でこいで進む。

裏十間川でカヤックや舟遊びを楽しむイベント。観光客にも人気がある。

インタビュー

クリークの使い方を知ってほしい

むかしから佐賀の人たちはクリークによりそってくらしてきましたが、最近では「クリークは危険」と、フェンスが立てられます。人が近寄れなくなると、クリークとの付き合い方がわからなくなります。道路も危険ですが、わたり方などをおとなが教えます。クリークの使い方も、同じように身につけることがたいせつです。クリークのイベントなどを通じて、おとなも子どもも、安全な使い方を知り、この地域にしかない水文化を楽しんでほしいと思います。



「さがクリークネット」(市民活動団体)代表の川崎さん。

す い が い

水害をどうやって防ぐか



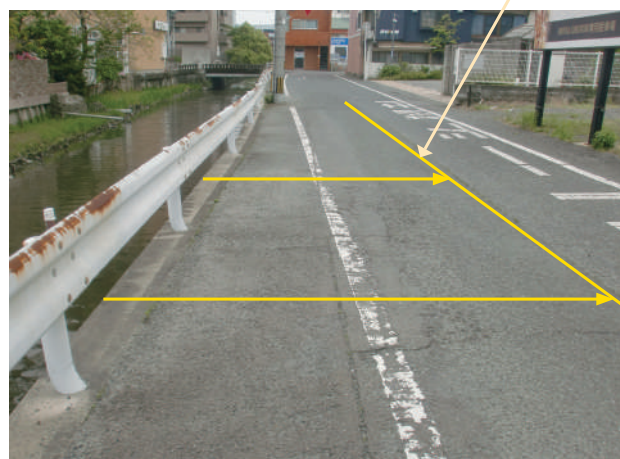
佐賀平野は低くて平らなので、大雨がふったときには排水がおい
つかず、陸地にたまってしまいます。災害につながることもあります。

内水はらんがおこる

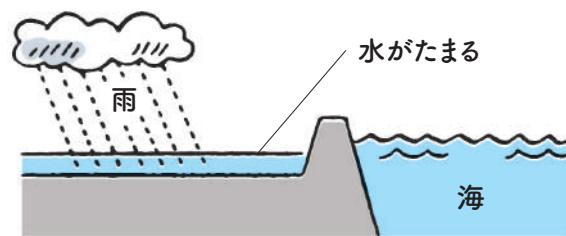
台風や豪雨などで、大量の雨がふると、川か
ら海への排水がおいつかずに、建物や地面に水
があふれてしまうことがあります。これを「内
水はらん」といい、住民に大きな被害が出ま
す。佐賀平野ではクリークからあふれ、市内に
たまってしまうことが、たびたびあります。

そこで、災害にそなえて、高い場所に駐車場
をつくったり、水を海へ流す排水ポンプをふや
したりしています。また、水害のハザードマッ
プをつくり、住民に防災へのそなえをよびかけ
ています。

ここまで
クリークだった



▲以前クリークだったところが住宅地や道路になり、
排水できる量が減っている。



▲とくに満潮のときには、陸のほうが低くなって、
水が海へ流れていかない。

佐賀駅前



令和元年8月、
九州北部に大
雨。JR佐賀駅
前も内水はらん
がおきた。

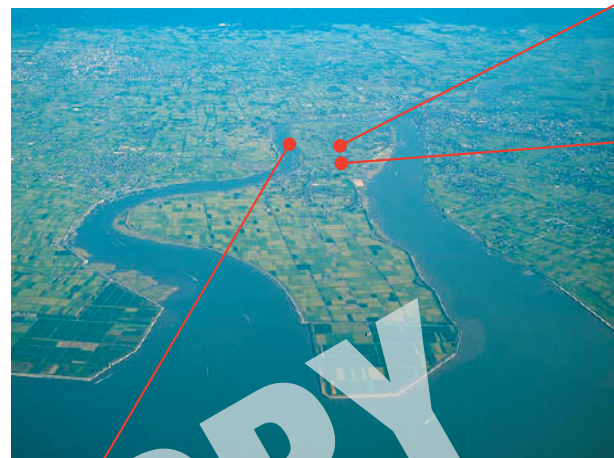
クリークの幅がせまくなった

近年、集中豪雨など大雨がふることが多くな
り、内水はらんなどの災害も多くなっています。
地球温暖化などの気候変動が原因と考えら
れていますが、佐賀平野の場合、町が大きくな
り、クリークの幅がせまくなって、水をためる
量が減ったり、排水する力が弱くなったりした
ことも、原因のひとつと考えられています。

クリークをほって深くすればいいと考えるか
もしれませんが、深くすると海より低くなって
全然流れなくなるので、役にたちません。

川にかこまれた大詫間の場合

佐賀市川副町大詫間は筑後川と早津江川の間にある中州の
南側(北側は福岡県)。まわりを堤防でかこっている低い土
地。



水防倉庫

水害にそなえて、土
のうを入れる袋、ス
コップ、くい、一輪
車などの道具を入れ
ておく。

大詫間小学校

避難場所



▲水害のときの避難場所は、小
学校の屋上の屋根裏。外にもう
けられている避難階段で上がる。

堤防



▲早津江川の堤防。海がすぐ近いので、
のり漁船が保管されている。

▶日ごろからハザ
ードマップを見て、避
難場所などを知って
おこう。



クリークの事故にそなえて

クリークは浅いものが多いのですが、
深いクリークもあります。深いクリー
クに落ちたとき、子どもがひとりで上
がることはなかなかむずかしいです。
そこで、深いクリークには、ところど
ころにはしごがそなえつけられたり、
うき輪が用意されたりしています。



うき輪



大詫間小学校のすぐ横にもクリー
クがある。

「ねこ」で背中があたたかい



木曽地域では、冬になると「ねこ」を背負い、寒さから身を守ります。動物の猫ではなく、むかしから愛用されてきた防寒着です。

南木曽町ではいまも

「ねこ」は、木曽地域に伝わる防寒着です。そでがなく、ちゃんちゃんこに似ていますが、前の部分もないので動きやすく、着たまま寝ることもできます。「ねこ」という名前は、「ねんねこぼんてんからきている」という説や、「着ている姿が猫背に見えるから」「猫のようにあたたかいから」という説があります。

かつて「ねこ」は、家庭でつくられていました。古い着物をほどこき、養蚕の過程で出る、出荷できないまゆからとった真綿を中に入れるなど、ものが手に入りにくかった時代の人の知恵がこめられています。現在は、合成繊維の綿でできた「ねこ」も売られており、南木曽町では子どももおとなも愛用しています。



着ているのを
忘れるくらい軽いよ

「ねこ」は、背中だけにあ
てて防寒着。肩ひもがつ
いていて、ランドセルの
ように背負う。

インタビュー

岡谷でも「ねこ」を着ています

「ねこ」というと南木曽を思いますが、岡谷市でも着ている人はいます。信州は寒さがきびしく、6月ごろまで暖房をつけるので、防寒着があると安心です。ねこは背中があたたかいし、動きやすいので、着たまま庭仕事や家事もできます。



岡谷市在住の菊池さん。

養蚕とは

養蚕は蚕を育て、蚕がはきだしてつくるまゆから絹糸をとる仕事です。蚕とは、ガの一種の幼虫です。養蚕をする農家は、信州のほか、群馬県などにもあり、養蚕は、かつて日本の重要な産業でした。

くわ畑



▲蚕は、くわの葉を食べて育つ。

染める



▲糸にいろ
んな色をつける。

織る



◀機織り機
を使って、糸か
ら布を織る。

まゆ



▲蚕は成長すると真っ白なまゆをつくる。まゆから糸や真綿をとりだす。

真綿に

糸がとれないまゆから、真綿をつくる。

紬



◀信州の特産品の紬になる。これで着物などをつくる。

もめん綿と真綿

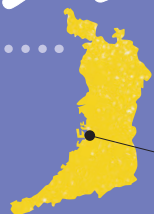
綿にはおもに2種類あります。もめん綿は植物からとる綿で、軽くてあたたかいのが特徴です。

真綿は蚕のまゆからとれる綿で、糸にならないまゆからつくられます。白くて光沢があり、じょうぶで保温性にすぐれています。



もめん綿は「ワタの木」の種子についたせんい。

タンクが並ぶ臨海工業都市



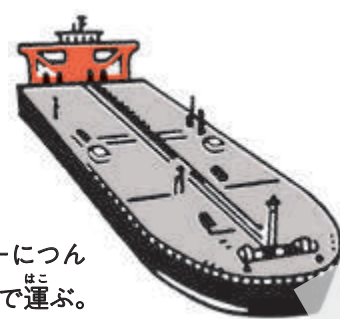
堺市

大阪湾の広大な埋め立て地には、石油化学コンビナートのタンクが並んでいます。阪神工業地帯は日本でも有数の工業地帯です。

油田

日本は9割以上の原油を、サウジアラビアやUAE（アラブ首長国連邦）、クウェート、カタールなどの中東の国々から輸入している。写真は、海底の油田から原油をほりだしているところ。

タンカーについで、日本まで運ぶ。



石油からできるもの（例）



海外へ開かれた港

海に面した地域では、海外から船で原材料を選びこみ、工場で加工して製品にすることができます。そのため、内陸の地域よりも、港のある地域には工場が集まりやすい特徴があります。そのような地域を臨海工業地帯といい、全国各地にあります。大阪湾の周辺には阪神工業地帯が広がっています。

工業地帯の中に、石油化学コンビナートがあります。それぞれの役割をもった工場が集まって、連携しながら、石油を加工してさまざまな製品をつくっています。また、鉄鋼、機械、造船などの工場もたくさんあります。

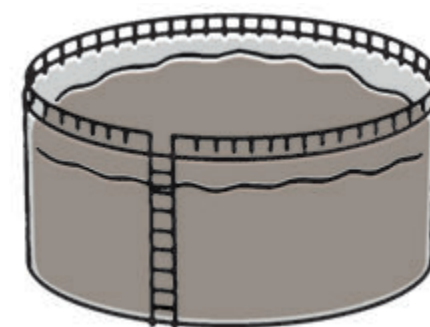
コンビナート



堺泉北臨海工業地帯は、堺泉北港に広がる石油化学コンビナート。連携して製品をつくれるように、石油精製工場と、さまざまな化学工場がパイプラインでつながっている。

原油タンク

タンカーに管をつないで原油を移して、ためておく。タンクの大きさはいろいろあって、高さ25mほどのタンクは、7階建てのビルくらいの高さ。



タンクの屋根は原油の上にいる。原油が蒸発しないようにするためと、空気にふれて変化しないようにするため。

むかしから貿易の都市だった

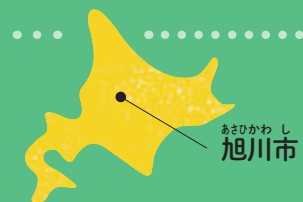
堺が商人の町になったのは、海に面しているからです。当時は、品物を運ぶのは、船がいちばん速かったのです。

15～16世紀ごろには、国際貿易港としてさかえました。中国の明や、東南アジアを行き来する船が出入りして、堺は

発展していきます。さらに、鉄砲の生産をいち早く始めたことで、莫大な富をもつ商人も生まれました。

堺の町は周囲を堀でかこみ、敵の侵入を防いでいました。戦国時代でも、大名には支配されない自由都市でした。

良質の木材は家具にむく



旭川市

日本の森林面積の約22%が北海道というほど、北海道には樹木がたくさんあります。その半分ほどがナラなどの「広葉樹」です。

家具づくりがさかん

広葉樹は幹がちみつなのでかたく、家具や家の床にむきます。旭川市では、100年以上前から、たんすなどの家具をつくっていて、最近はいすやテーブルを多くつくっています。また、森林から樹木を切り出して丸太にする「製材」もさかんで、海外へ輸出もしています。

広葉樹とは

広葉樹は、広くて平らな葉の樹木。針葉樹は葉が針のように細い樹木。広葉樹は針葉樹より、育ち方がゆっくりだが、北海道は寒いので、さらに育つスピードが遅いため、幹がちみつになり、かたく、重くなる。

家具ができるまで

旭川市にある家具工場では、家具職人さんが、いろいろないすをつくっている。



乾燥

◀ 1年以上おいて、木がふくむ水分を乾燥させる。



切る

▲ 乾燥させたら、いすの部品を切り出す。



加工



▲ うすく切った板にのりをつけて重ね、機械で圧力をかけて曲げる。さまざまな形の部品をけずり出す。



いすの背になる部分。

みがく



▲ 途中で何度もみがく。

ぬる



▶ 1脚に何度も塗装（ぬる）の工程がある。

はる



◀ 背やすわるところに布や革をはる。

組み立て



▶ 1脚ずつ組み立てる。

検査



◀ できあがったら検査をする。

インタビュー

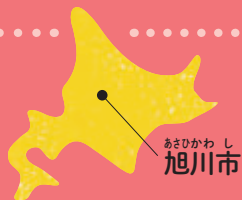
木を植える活動もしています

旭川の森には木がたくさんあり、適度に切らないと陽の光が入らずに森がだめになってしまうので、木に感謝しながら使っています。でも、切ってばかりでは木がなくなります。そこで、わたしたちは木を植える「植林活動」を続けています。100年後、200年後の森づくりで、森への恩返しです。



杉本さん（旭川家具工業協同組合）

たいへんな除雪と排雪



雪がつもる時期には、夜中に道路の「除雪」をしています。雪を運び出す「排雪」も、毎日のおこなわれるたいへんな作業です。

夜間作業



ふきとばされた雪が
ダンプカーの荷台に
積みあがっていくよ



▲ロータリー除雪車（右）とダンプカー（左）はいっしょに作業をする。ダンプカーが雪でいっぱいになったら、すぐに次のダンプカーがくる。

インタビュー

毎日が雪とのたたかい

旭川市で除雪が必要な道路は約 2200kmあり、これは旭川市から沖縄までくらいの距離です。朝から夜中までおこなっても、なかなか進みません。除雪した雪は運び出し、春まで河原につんでおく方法のほか、下水道処理水にとかす方法もあります。除雪と排雪には、たくさんのお金がかかります。けれど、地域の人たちのくらしを守るため、今日も雪とたたかっているのです。（金盛さん／旭川市土木部）

寒いときの夜中の作業

道路の除雪をするのは、その道路を管理している都道府県や市町村などの自治体や国です。

除雪作業は夜中におこないます。朝、通勤や通学をする人たちのために道路の雪を、除雪車を使って道路のわきに寄せておくのです。

なお、自分の家から道路に出るまでの道は、自分で雪かきをします。

雪は広い河原につんでおく

道路わきの雪を運び出す排雪も、ほぼ毎日おこなわなければいけない作業です。除雪した雪をダンプカーにつんで、じゃまにならない場所へ運びます。旭川市では、春になってとけるまで、石狩川の河原などにつんでおきます。

自分の家の雪かきをしたら、庭につんでおくか、業者にたのんで運んでもらいます。

雪堆積場



除雪した雪は川に直接すてない。ダンプカーが置いていった雪を、ブルドーザーが集めて山にする。（石狩川／旭川市）